高畑遺跡

－第21次調査－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1284集

2016

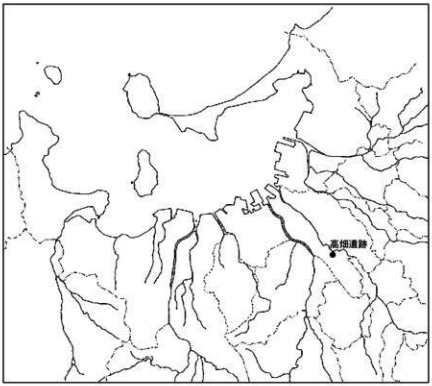
福岡市教育委員会

TAKA BATAKE

高畑遺跡

－第21次調査－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1284集



遺跡略号　TKB-21
調査番号　1428

2016

福岡市教育委員会

(1) SE9出土遺物

(2) SD21出土　中細形銅戈鋳型

序

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との文化交流の窓口として発展してきました。福岡市内には数多くの歴史的・文化的遺産があり、それらを保護し、後世に伝えていくことは、現在に生きる私どもの責務であります。

本市では、近年の著しい都市化の中で失われてしまう埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存によって後世まで伝えるよう努めています。

本書は、九州管区警察学校本館の建設工事に伴って実施した高畑遺跡第21次調査について報告するものです。

今回の調査では、弥生時代中期の井戸や古墳時代中期の竪穴住居等の遺構が発見されるとともに、弥生時代から古代にかけての土器や須恵器、瓦を中心とする遺物が多く出土しました。これらは当地域の歴史を解明していく上での重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、国土交通省九州地方整備局および九州管区警察学校をはじめとする関係者の皆様方には多大なるご協力とご理解を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成28年３月25日

福岡市教育委員会
教育長　酒井　龍彦

例　言

1．本書は、福岡市博多区板付６丁目１番53・54地内において、福岡市教育委員会が九州管区警察学校本館新築工事に伴い、平成26（2014）年10月１日から同年12月26日にかけて発掘調査を実施した高畑遺跡第21次調査の報告書である。
2．発掘調査および整理・報告書作成は、受託事業として実施した。
3．報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4．本書に掲載した遺構の実測図作成および写真撮影は、調査担当の吉田大輔が行った。
5．本書に掲載した遺物の実測図作成は、谷直子・小林義彦・林田憲三・山本晃平・吉田が、写真撮影は井上繭子・吉田が行った。
6．本書に掲載した挿図の製図は、林由紀子・吉田が行った。
7．本書で用いた方位は磁北で、真北より６°40′西偏する。
8．調査で検出した遺構については、通し番号を付し、報告に際し遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は竪穴住居(ＳＣ)、井戸(ＳＥ)、土坑(ＳＫ)、溝・自然流路(ＳＤ)である。
9．本書に関わる記録類・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されるので活用されたい。
10．本書の編集・執筆は吉田が行った。

遺　跡　名	高畑遺跡	調　査　次　数	第21次	遺　跡　略　号	TKB-21
調　査　番　号	1428	分布地図図幅名	024板付	遺跡登録番号	0095
申請地面積	約2,565㎡	調査対象面積	約1,236㎡	調　査　面　積	1,235.97㎡
調　査　期　間	平成26(2014)年10月１日～同12月26日			事前審査番号	25-1-55
調　査　地	福岡市博多区板付６丁目１番53・54				

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 2
　1．高畑遺跡と周辺の遺跡 …… 2
　2．高畑遺跡のこれまでの調査 …… 2
Ⅲ．調査の記録 …… 5
　1．概要 …… 5
　　1）調査の経過 …… 5
　　2）調査の概要 …… 5
　2．遺構と遺物 …… 8
　　1）竪穴住居（SC） …… 8
　　2）井戸（SE） …… 10
　　3）土坑（SK） …… 15
　　4）溝・自然流路（SD） …… 24
　　5）遺物包含層 …… 29
Ⅳ．結語 …… 32

挿 図 目 次

第１図　周辺の遺跡分布図（１/25,000） …… 3
第２図　高畑遺跡調査地点位置図（１/4,000） …… 4
第３図　第21次調査区位置図（１/1,000） …… 6
第４図　調査区全体図（１/200） …… 7
第５図　SC30実測図（１/60） …… 9
第６図　SC30出土遺物実測図（１/１・１/３・１/４） …… 11
第７図　SC32実測図および出土遺物実測図（１/60・１/３） …… 12
第８図　SC34実測図および出土遺物実測図（１/60・１/３） …… 13
第９図　SC36実測図および出土遺物実測図（１/60・１/３） …… 14
第10図　SE９・10・27実測図（１/30） …… 15
第11図　SE９出土遺物実測図（１/４） …… 16
第12図　SE10・27出土遺物実測図（１/３） …… 17
第13図　SK５・６・15・24・28・41実測図（１/30） …… 18
第14図　SK５・６・24・28出土遺物実測図（１/３・１/４） …… 19
第15図　SK15出土遺物実測図①（１/３） …… 20
第16図　SK15出土遺物実測図②（１/３） …… 21
第17図　SK41出土遺物実測図①（１/３） …… 22
第18図　SK41出土遺物実測図②（１/３） …… 23

第19図　SD７・８・21・29実測図（１/100・１/80・１/40）…… 25
第20図　SD21出土遺物実測図①（１/４）…… 27
第21図　SD21出土遺物実測図②（１/４）…… 28
第22図　SD29出土遺物実測図（１/４）…… 29
第23図　遺物包含層出土遺物実測図①（１/４）…… 30
第24図　遺物包含層出土遺物実測図②（１/４）…… 31

表　目　次

第１表　高畑遺跡調査一覧表 …… 4

巻頭図版目次

⑴　SE９出土遺物
⑵　SD21出土　中細形銅戈鋳型

図 版 目 次

図版１
⑴　Ⅰ区全景（南西から）
⑵　Ⅱ区全景（南西から）
⑶　Ⅱ区東側全景（南西から）

図版２
⑷　SC30（北から）
⑸　SC32（北東から）
⑹　SC36（北東から）
⑺　SE９遺物出土状況（北から）
⑻　SE９（北東から）
⑼　SE10（北から）
⑽　SE27（東から）
⑾　SE27（南から）

図版３
⑿　SK５（南東から）
⒀　SK15（北から）
⒁　SK41（南から）
⒂　銅戈鋳型出土状況（南東から）

図版４
⒃　青銅製鋤先出土状況（北から）
⒄　SD７・８南側部分（北西から）
⒅　遺物包含層検出状況（北西から）
⒆　SD29（北西から）

図版５
⒇　SE９出土　51
(21)　SE９出土　57
(22)　SE９出土　58
(23)　SE９出土　59
(24)　SK15出土　96
(25)　SK15出土　97

図版６
(26)　SK15出土　89
(27)　SK15出土　100
(28)　SK41出土　107
(29)　SK41出土　118
(30)　SD21出土　157
(31)　遺物包含層出土　221

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市博多区板付６丁目１番１地内に所在する九州管区警察学校では、建物の老朽化に伴い、本館の新築工事が計画された。国土交通省九州地方整備局営繕部計画課より、平成25（2013）年５月31日付で、九州管区警察学校本館新築工事に伴う埋蔵文化財の有無の確認について、福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課宛てに依頼がなされた。申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である高畑遺跡に含まれることから、同年８月27日から29日に確認調査を実施し、その結果、現地表下110～120㎝で溝が、200～230㎝で遺物包含層が確認された。また、平成17（2005）年にも対象地の一部で確認調査が実施されており、現地表下100㎝で遺構が確認されていることから、遺構の保全等について申請者と協議を行った。その結果、工事対象面積2,565㎡のうち、削平や造成の影響で遺構等が確認されなかった部分および既存埋設管の存在が予測された部分を除く範囲で、工事による埋蔵文化財への影響が回避できない約1,236㎡については記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成26（2014）年８月４日付で国土交通省九州地方整備局を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財調査委託契約を締結し、同年10月１日より発掘調査を、翌平成27年度に資料整理・報告書作成を行うこととなった。

２．調査の組織

調査委託　国土交通省九州地方整備局
調査主体　福岡市教育委員会
（発掘調査：平成26年度・整理報告：平成27年度）
調査総括　経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課　課長　常松幹雄　（26・27年度）
調査第２係長　榎本義嗣　（26年度）
調査第１係長　吉武　学　（27年度）
庶　　務　同埋蔵文化財審査課　管理係長　内山光司　（26年度）
大塚紀宣　（27年度）
管理係　川村啓子　（26・27年度）
事前審査　同埋蔵文化財審査課　事前審査係長　佐藤一郎　（26・27年度）
事前審査係主任文化財主事　池田祐司　（26・27年度）
事前審査係文化財主事　福薗美由紀　（26・27年度）
調査担当　同埋蔵文化財調査課　文化財主事　吉田大輔　（26・27年度）
発掘作業　石川洋子　井上久美子　江浜明徳　岡村まどか　緒方圭子　香月秀樹　兼田ミヤ子
木田憲作　木田ひろ子　近藤英彦　坂口壽美子　瀬戸裕子　芹川淳子　立山温
塚副義一郎　鵜丸和良　富岡洋子　中辻俊己　長野智鶴　中村健三　野田英機　服部弘勝
吹春憲治　水田正敏　水田ミヨ子　満田隆　諸泉良子　安高邦晴　安武陽子　鷲津真二郎
整理補助　谷直子
整理作業　井手由紀子　林由紀子　森山晶子

Ⅱ．遺跡の立地と環境

1．高畑遺跡と周辺の遺跡

玄界灘に面し、背後に脊振・三郡山系をひかえる福岡市には、これらの山系から派生する山塊、丘陵によって中小の平野に画され、東側から粕屋、福岡、早良、今宿平野と呼称される。今回報告する高畑遺跡は、このうち福岡平野に位置する。同平野の西側には脊振山系に属する油山（標高：597m）から北側に延びる丘陵が派生し、早良平野との間を画している。また、東側には三郡山地から派生する大城山(標高:410m)の山麓から北西方向に月隈丘陵が延び、粕屋平野との境界をなしている。また、平野内には御笠川、那珂川が博多湾に向かって北流し、沖積地が形成されるが、Aso- 4 火砕流堆積による洪積台地も点在している。高畑遺跡は、御笠川とその支流である諸岡川に挟まれた洪積台地およびその東側に広がる沖積地上に展開している。

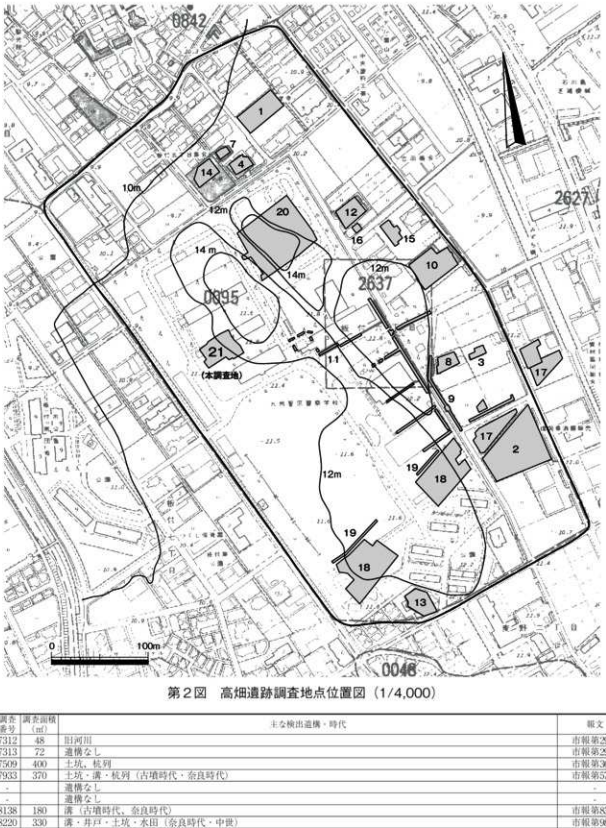
次に、本遺跡周辺の遺跡について概観する。御笠川と諸岡川の間にある洪積台地は南北方向に延びており、本遺跡の南東側には麦野Ａ遺跡が立地する。同遺跡は竪穴住居を主体とする古代の集落に代表されるが、柵列や溝、門等で構成される官衙的な遺構の検出例がある。本遺跡の北西側には、初期の水稲農耕集落として著名な板付遺跡が所在する。初期水田や弥生時代初期の環濠集落については、国史跡として指定され、保存活用が図られている。また、同遺跡の北側の御笠川と諸岡側が合流する沖積低地には、那珂君休遺跡が立地している。古墳時代から中世にかけての水田が確認され、当該期の水田区画や灌漑施設を理解する上で、貴重な資料となっている。また、同様の沖積地に立地する遺跡としては、本遺跡の南東側微高地に広がる井相田Ｃ遺跡があり、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物群や多数の墨書木札類が出土した室町時代の溜め井等が検出されている。さらに中世における水田化も確認され、複数の旧河道とその間の微高地における土地利用の様相が明らかになりつつある。また、西側の那珂川東岸でも洪積丘陵が延びており、弥生時代から連綿と継続する那珂遺跡群や比恵遺跡群等が展開している。

2．高畑遺跡のこれまでの調査

本遺跡ではこれまでに20次の調査が実施されている（第２図、第１表）。市報第1150集「Ⅰ- 4．これまでの調査」で既往の調査についてまとめられており、参照されたい。本遺跡は洪積台地と東側沖積地に展開しているが、台地上の調査例は少なく、第11・18・19・20次と今回報告する21次の５調査区である。このうち、18次調査は、弥生時代から古墳時代の集落が展開することが確認され、古墳時代中期の滑石製臼玉の製作工房跡が検出されている。台地西側では、切り通しによって設けられた官道（水城東門ルート）が路盤整地や地鎮遺構を伴って良好な状態で検出され、第20次調査でも、この延長が確認されている。台地の東側には８世紀代の古代寺院（高畑廃寺）を想定する考えもあるが、官道の北側延長部にあたり、また20次調査で確認された鬼瓦や鏡・石製品・斎串・銭貨等祭祀に関連する遺物が出土した井戸や溝等の遺構の存在もあり、その存在や位置についても、再考の余地があろう。この想定に及んだ出土遺物の内容から、官衙（那珂郡衙）とする意見もある。これらの調査例を除くと、本遺跡の調査は、台地縁辺や沖積地の調査が大半を占める。東側沖積地は調査例が比較的多く、主要な遺構として古墳時代と古代の溝が確認されている。前者は、南側より第10次、15次、16次、12次と延長し、後者は、第２次、17次、９次、８次、10次に続く。なお、両者は第10次調査区で重複関係にあり、この地点で後者の溝は直角に折れ、東に向きを変えている。第８次、17次調査では、人面墨書土器や斎串、絵馬等の木製祭祀遺物が出土し、律令的な祭祀を窺わせる内容をもっている。

第１図　周辺の遺跡分布図（1/25,000）

1 高畑遺跡	2 板付遺跡	3 那珂君休遺跡	4 那珂遺跡群	5 比恵遺跡群	6 山王遺跡
7 東那珂遺跡	8 雀居遺跡	9 五十川遺跡	10 井尻Ｂ遺跡	11 諸岡Ａ遺跡	12 諸岡Ｂ遺跡
13 下月隈Ｃ遺跡	14 立花寺遺跡	15 井相田Ｄ遺跡	16 三筑遺跡	17 麦野Ａ遺跡	18 井相田Ｃ遺跡
19 仲島遺跡	20 須玖遺跡群	21 南八幡遺跡	22 麦野Ｂ遺跡	23 麦野Ｃ遺跡	



第２図　高畑遺跡調査地点位置図（1/4,000）

次数	調査番号	調査面積（㎡）	主な検出遺構・時代	報文
1	7312	48	旧河川	市報第29集
2	7313	72	遺構なし	市報第29集
3	7509	400	土坑、杭列	市報第36集
4	7933	370	土坑・溝・杭列（古墳時代・奈良時代）	市報第57集
5	-		遺構なし	-
6	-		遺構なし	-
7	8138	180	溝（古墳時代、奈良時代）	市報第83集
8	8220	330	溝・井戸・土坑・水田（奈良時代・中世）	市報第98集
9	8221	94	土坑・溝・杭列（奈良時代）	市報第98集
10	8436	1,560	溝（古墳時代、奈良時代）	市報第115集
11	8441	550	竪穴住居・貯蔵穴・井戸（弥生時代・古墳時代）	市報第115集
12	8649	600	溝（弥生時代・古墳時代）	市報第210集
13	8702	480	井戸・土坑（弥生時代、古墳時代）	年報vol.2
14	9368	593	溝・旧河川（奈良時代）	市報第458集
15	9753	254	溝・旧河川（弥生時代・古墳時代）	年報vol.12
16	9774	70	溝（古墳時代）	市報第934集
17	9833	2,063	溝・土坑・水田・旧河川（弥生時代・奈良時代・平安時代）	市報第676集
18	9936	4,750	竪穴住居・掘立柱建物・貯蔵穴・井戸・土坑・溝・古代官道（弥生時代・古墳時代・奈良時代）	市報第699集
19	0261	204	竪穴住居・井戸・土坑・溝（弥生時代・古墳時代・中世）	市報第799集
20	0833	5,060	竪穴住居・掘立柱建物・井戸・貯蔵穴・土坑・溝・古代官道・旧河川（弥生時代・古墳時代・奈良時代・中～近世）	市報第1150集
21	1428	1,236	竪穴住居・井戸・土坑・溝・旧河川（弥生時代・古墳時代・奈良時代・中世）	本書(第1284集)

第１表　高畑遺跡調査一覧表

Ⅲ．調査の記録

１．概　要

１）調査の経過

高畑遺跡第21次調査区は、博多区板付６丁目１番53・54に所在する。調査前の状況は、標高約11.3mを測る学校用地であった。調査の対象は「Ⅰ．－１．調査に至る経緯」で記したとおり、建物建設部分の1,236㎡である。

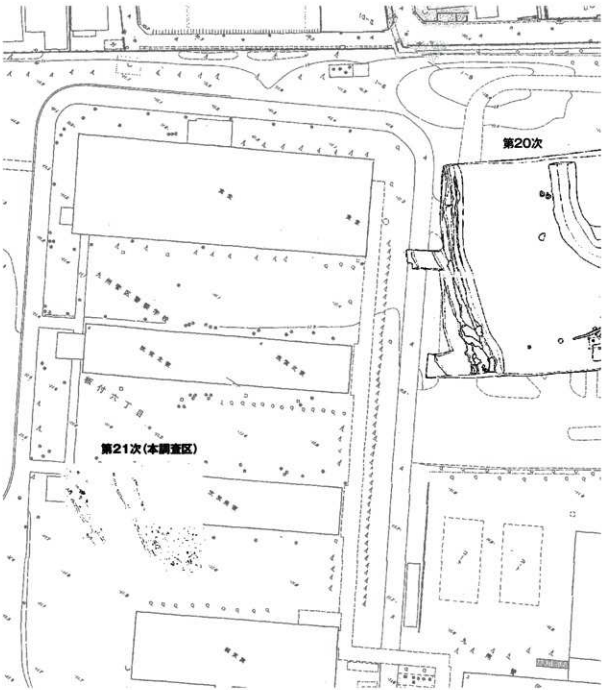
発掘調査は平成26（2014）年10月１日に開始した。調査によって発生する排土を場内で処理する必要があったため、まず、調査範囲の北側半分をⅠ区として重機による表土剥ぎ取りに着手し、遺構および遺物包含層が確認される地表下200～230㎝まで掘り下げた。併行して機材等の搬入、調査区の壁面養生などの環境整備を行った。10月14日から、遺構検出等の人力作業を開始し、その後、検出した遺構の掘り下げや、遺物の取り上げを行った。確認された遺構は適宜、写真撮影を行い、また１/10・１/20の図面を作成して記録した。11月13日に高所作業車によるⅠ区の全体写真を撮影し、翌14日にⅠ区の調査を終了した。同日、Ⅰ区の重機による埋め戻しと排土の反転を開始し、調査範囲の南側半分の表土剥ぎ取りに着手した。こちら側をⅡ区とし、11月28日より、重機による作業と併行して、人力での遺構検出等の作業が可能な部分から調査を実施した。検出した遺構については、Ⅰ区と同様に写真撮影や記録の作成を行った。12月18日に高所作業車によるⅡ区の全体写真の撮影を行い、Ⅱ区の調査を終了した。翌19日からⅡ区の埋め戻し作業を開始し、26日にユニットハウスや機材等の撤去および埋め戻し作業を終了し、発掘調査の全ての工程を完了した。

２）調査の概要

第21次調査区は、高畑遺跡の中央部北寄りに立地する。地形図をみると、第20次調査が行われた部分が丘陵の頂部に近く、本調査地は、丘陵が南に向かって緩やかに傾斜する裾野部分にあたる（第２・３図）。今回、発掘調査を実施した範囲は、九州管区警察学校構内の新本館建設予定地で、現況は標高約11.4mの更地であった。この場所は、同校の研修寮跡地であり、この建物解体に伴う基礎の抜き取りやそれ以前の大規模な造成によって、大きく削平・撹乱を受けており、遺構検出面の直上まで、これらの土層が堆積する。

発掘調査は、排土を場内で処理する必要があったため、調査範囲の北側半分をⅠ区、南側半分をⅡ区として調査を実施した（第４図）。Ⅰ区ではガラ等を含む表土を重機により、地表下約200～230㎝まで掘り下げ、標高約９mの八女粘土層に近い鳥栖ローム層下部で遺構および遺物包含層を検出した。Ⅱ区も、Ⅰ区と同様に近現代の削平や撹乱を受けていたが、東側の一角では12×14mの範囲で鳥栖ローム層が比較的よく残存しており、この部分では地表下40～50㎝、標高約11mで竪穴住居等の遺構が検出された。

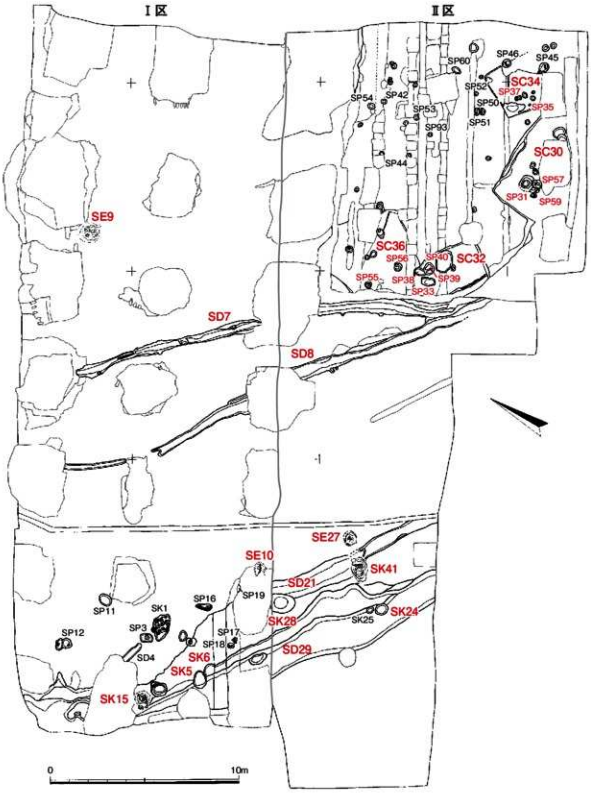
今回の発掘調査では、弥生時代中期後半の井戸、古墳時代中期の竪穴住居・井戸・土坑、古代から中世の溝、古墳時代から古代のものと考えられる自然流路等を検出し、弥生時代から古代にかけての土器、土師器、須恵器、瓦等を多く含む、遺物包含層を確認した。遺構検出面は、削平や造成の影響を大きく受けているため明確には言えないが、旧地形を反映し、東から西に向かって緩やかに傾斜し、調査区の西側で傾斜が強くなっている。調査区の南西側一帯で確認された灰褐色および黒褐色粘質土の遺物包含層はこの落ちの部分に堆積しているものと考えられる。また、Ⅱ区の東隅の一角を除く部



第３図　第21次調査区位置図（1/1,000）

分では、Ⅰ区の北東側で井戸SE ９を検出したのみで、遺構は確認されず、調査によって確認された遺構の大半は調査区の中央より南側に分布する。地形的に北～東側が南～西側よりも標高が高かったため、撹乱による影響を大きく受け、井戸のように深い遺構のみ残ったものと考えられる。

調査時の遺構番号は、遺構の種別に関わらず通し番号を付し、欠番はあるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則として調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。また、調査はⅠ区とⅡ区とに分けて行ったが、Ⅰ・Ⅱ区にまたがって検出された溝は、調査時にはⅠ・Ⅱ区それぞれでの検出時に別々の遺構番号を付していたが、それが同一の遺構であると判断できたため、整理・報告時には遺構番号を統一している。



第４図　調査区全体図（1/200）

2．遺構と遺物

調査はⅠ・Ⅱ区に分けて実施したが、遺構は検出された区に関わらず、種別ごとに報告する。

1）竪穴住居（SC）

Ⅱ区の東側で鳥栖ローム層が比較的よく残存していた12×14mの範囲（以下、台地残存部分という）で、古墳時代の竪穴住居４軒を検出した。住居はこの一角の南西から南側に分布している。

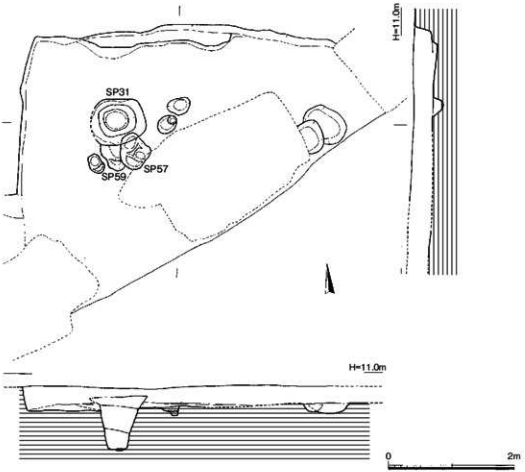
SC30（第５図） 台地残存部分の南東中央付近で検出された。遺構の東側の大半が削平されており、北壁4.7m、西壁2.5mが遺存し、残存壁高は0.4mである。全体の形状は方形か長方形となると推測される。埋土は黒褐色粘質土で黄褐色粘質土が斑状に混じり、炭化物も多く含まれていた。北壁側には、幅20cm程度で、周囲の床面から10cmほど高くなっている部分があり、出入り口部分のステップであると考えられる。埋土の掘り下げ中に、床面よりも10cm程高い位置でSP31が検出された。長軸0.9m、短軸0.7cmの柱穴である。また床面ピットも数基検出され、このうちSP57中から、滑石製臼玉やその未製品が数点出土した。そのため、SP57の埋土とこのピット周辺の住居埋土を、ふるいと目の細かい網を用いて水洗いしたところ、製品･未製品を合わせ計17点がみつかった。第６図に図示したのは、そのうちの16点である。平成11・12年度に実施された高畑遺跡第18次調査でも、古墳時代中期末の竪穴住居から滑石製玉の製作工程を復元できる各段階の未製品や滑石の原石、滑石の粉末も検出されており、滑石製臼玉の製作工房跡とみられる。

出土遺物（第６図） 遺物は埋土中から多く出土したが、小片が多い。土師器を主体とし、混入したと考えられる弥生土器も少量出土した。１は壺の口縁部で、内湾しながら短く立ち上がる。全体に磨滅が激しく調整は不明瞭だが、頸部に刷毛目が残る。２・３・４は甕の口縁部である。緩やかに外反しながら立ち上がる。２・３・４とも全体に磨滅し、調整は不明瞭だが、２・３の内面頸部は横方向のヘラケズリ、４は横方向の刷毛目で調整される。３の内面には煤が付着する。５～９は鉢である。５・８・９は小型の鉢で、５は口径8.8cmに復元でき、口縁部は短くわずかに外に開く。外面は刷毛目後ナデ消している。内面に粘土の接合痕が残る。８は口径12.8cmに復元でき、外面は縦方向の刷毛目、口縁部内面は横方向の刷毛目、胴部内面は横方向のヘラケズリが施される。９は口径12.0cmに復元でき、口縁部内面は横方向の刷毛目、胴部内面は斜め方向のヘラケズリ調整である。器面全体に磨滅がみられる。６・７は中型の鉢で、６は口径15.7cm、７は口径15.8cmに復元できる。６の外面は縦方向の刷毛目、内面口縁部は横方向の刷毛目、胴部は斜め方向のヘラケズリが施される。７は内面頸部付近に指オサエ痕が残り、それより下位は横・縦方向のヘラケズリが施される。全体に調整は粗い。10は坏で底部周辺が欠損する。口径は11.9cmで、明褐色を呈し、焼成がやや不良で軟質である。外面胴部はヘラケズリが施され、口縁部から内面はナデ調整される。11・12は甑の把手で、11は外面を刷毛目調整後ナデ消している。13は高坏坏部口縁部片である。淡褐色～明褐色を呈し、胎土には細かい砂粒をわずかに含む。14は高坏脚部で、底径は10.0cmに復元される。内面にはヘラ絞り痕が残る。15は須恵器坏蓋である。灰黒色を呈し、胎土は精緻で砂粒がごくわずかに混じる。16は滑石製の紡錘車で、径5.1cm、厚さ0.5 ～ 1.3cm、重量は49.8 g である。平坦面は丁寧に研磨され、上部は成形時の加工痕が明瞭に残る。18は砂岩製の砥石で、図の上面および下側側面の２面を使用している。長さ13.3cm、幅10.45cm、厚さ1.8cmである。使用面はわずかに凹み、擦痕がみられる。滑石製玉類の未製品・製品が出土していることから、玉製作に用いられた可能性もある。17は鉄製刀子片である。長さ4.6cm、幅1.5cmが残存する。刀子は、刃部と茎部分が残存し、茎周辺に木質が付着する。残存した木質部分は柄あるいは鞘の可能性がある。19 ～ 34は滑石製臼玉の未製品および製品で、灰色を呈する。19は未製品で、

長辺9.5㎜、短辺６㎜の長方形で、厚さは２㎜である。原石を割り、その破片を薄く研磨し、方形に分割して、穿孔まで施した段階である。20 ～ 34は白玉である。径は3.8 ～ 5.5㎜で、ほとんどが4.0㎜前後にまとまっている。高さは２㎜前後、３㎜前後、3.5㎜、4.0㎜、4.5㎜のものがある。出土遺物から古墳時代中期後半に位置づけられよう。

SC32（第７図） 台地残存部分の西端中央付近で検出された。遺構の北側および西側が大きく削平されている。南壁1.5m、東壁2.5mが残存し、残存壁高は0.4mである。本来の形状は方形もしくは長方形になるものと推測される。埋土は、黒褐色粘質土で黄褐色粘質土が斑状に混じり、炭化物も多く含まれていた。床面ピットは５基確認できたが、主柱穴は判然としない。検出部分の北西隅で0.7×0.5mの範囲で焼土と硬化面が確認できた。埋土中からは土師器壺・甕・鉢・高坏が出土し、混入したと考えられる弥生土器小片も出土している。床面直上およびSP40から、比較的まとまって遺物が出土した。SC36と重複し、これよりも新しい。

出土遺物（第７図） 35・36は壺で、頸部から胴部が残存する。35は胴部から口縁部に向かってすぼまりながら、緩やかに立ち上がる。胴部の最大径は25.2cmを測る。外面は縦方向の刷毛目、口縁部内面は横方向の刷毛目、頸部より下部はヘラケズリが施される。36は胴部最大径が27.4cmを測り、外面は縦および斜め方向の刷毛目、内面はヘラケズリが施される。37は小型丸底壺で、口縁部が欠損する。外面は刷毛目、内面は指オサエ・指ナデで調整される。38・39は甕で、38の外面は刷毛目、内面頸部は横方向の刷毛目、胴部はヘラケズリが施される。39はくの字状を呈し、わずかに外反しながら



第５図　SC30実測図（1/60）

立ち上がる。口径は23.4cmを測る。外面頸部から胴部は縦方向の刷毛目が施され、口縁部は刷毛目後、ナデ消している。口縁部内面は横方向の刷毛目、頸部はヘラケズリが施され、胴部は一部に横方向の刷毛目が残る。40は坏で、口径13.8cmを測る。口縁端部はわずかに外反する。41は小型の鉢で、胴部外面と口縁部内面は横方向の刷毛目が施される。頸部は横ナデ、胴部内面もナデ調整される。胎土に金雲母を少量含む。42 ～ 44は高坏である。42・43は坏部で、42は口径17.8cmを測る。ともに全体に磨滅が著しく、調整は不明瞭である。44はやや小型の脚部で、底径12.0cmを測る。45は器台もしくは支脚である。外面にはヘラ状工具によるナデがみられ、内外面とも指オサエ・指ナデが残る。出土遺物から、古墳時代中期後半に位置づけられる。

SC34（第８図） 台地残存部分の東端付近に位置する。南側の大半が削平されており、北壁は削平されていないものとみられ、2.5mである。東壁は1.1m、西壁は1.5mが遺存する。残存壁高は0.2m程度である。埋土は暗褐色粘質土で黄褐色粘質土を斑状に多く含んでいた。床面ピットは４基検出したが、SP37は主柱穴と考えられる。小型の竪穴住居と考えたが、主柱穴と考えられる柱穴の位置を考えると東側にあるSP46も同規模の柱穴であり、また遺構掘方とした部分の東側周辺には、住居の埋土とした暗褐色粘質土が薄くまばらに堆積していた。遺構検出時に住居の掘方を誤認したとも考えられ、掘方がもう少し東側へ広がっていた可能性がある。埋土中からは土師器小片や黒曜石剥片などが少量出土した。床面からの出土遺物はない。

出土遺物（第８図） 46は土師器鉢の口縁部で、全体に磨滅が著しく調整は不明である。胎土には白色砂粒を多く含む。47は坏で、口径13.0cmに復元される。口縁部内外面は横ナデ、胴部から底部外面はヘラ削り、内面底部は板状工具によるナデが施される。

SC36（第９図） 台地残存部分の西端に位置する。全体に著しく削平を受けており、西壁は残存せず、他の壁も部分的に残存しているに過ぎないが、かろうじて全体の規模を知り得た。長軸約4.8m、短軸4.3mのやや不整な方形を呈し、残存壁高は0.15 ～ 0.2m程度である。主柱穴はSP55・56を含む４基で、中央部でも床面ピット２基が検出された。主柱穴はいずれもほぼ同規模で、径0.4 ～ 0.5m、深さ0.5 ～ 0.8mを測り、平面円形を呈する。SC32と重複し、これよりも古い。埋土は暗褐色土に黄褐色粘質土を斑状に多く含み、炭化物も多く含まれていた。埋土中から土師器の甕・鉢・甑の小片や鉄片等がわずかに出土した。

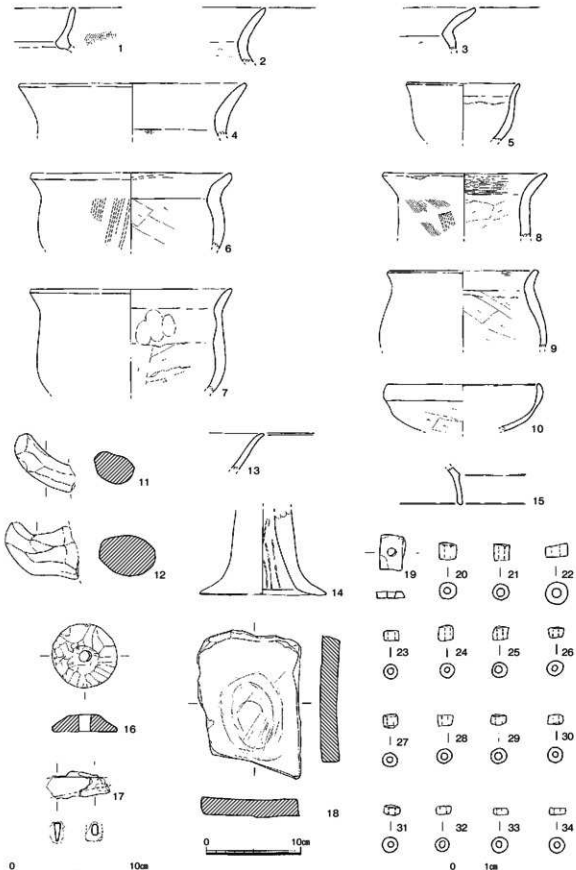
出土遺物（第９図） 48は土師器甕の口縁部で、わずかに外反する。内外面とも横ナデが施される。49は鉢の口縁部で、胴部内外面は横方向の刷毛目、口縁部周辺は横ナデが施される。50は板状の鉄片である。出土遺物から古墳時代中期後半頃の遺構と考えられる。

２）井戸（SE）

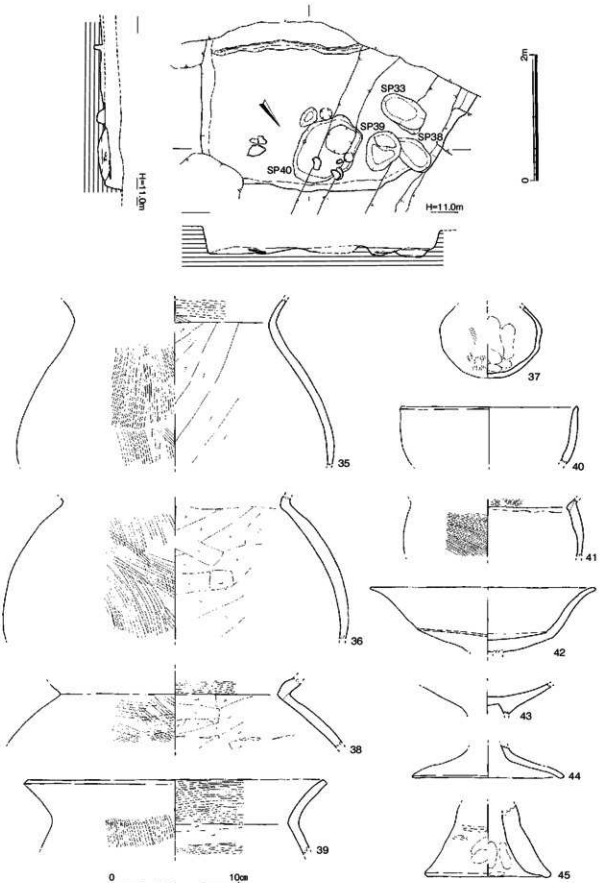
Ⅰ区で２基、Ⅱ区で１基の井戸を検出した。

SE ９（第10図） 調査区の北東側に位置し、八女粘土に近い烏栖ローム層で検出された。現状での井戸掘方は南北方向や1.0m、東西方向1.1mでやや不整な円形を呈する。深さは2.3mを測る。底面は径0.4mの平面円形を呈する。素掘りの井戸で、検出面から0.8m下がった標高９m付近で湧水が認められた。深さ0.4 ～ 0.7m付近の壁が抉れているが、底面に向かってほぼ直線的にすぼまっている。検出面からの深さ1.2 ～ 1.5m付近で遺物がまとまって出土した。上層および底面付近でも遺物が出土したが、量は少なく、小片が多い。Ⅰ区の北～東側では、このSE ９以外の遺構は確認されなかった。Ⅱ区の台地残存部分の標高から推測すると、最低でも0.7mは上部から掘り込まれていたのだろう。

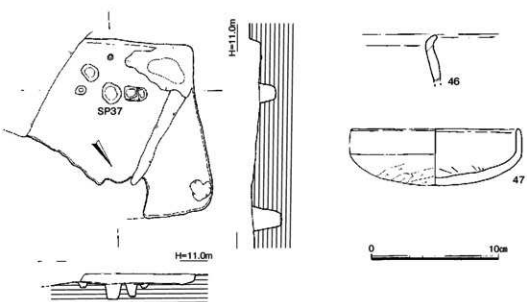
出土遺物（第11図） 51・52・54 ～ 57は丹塗袋状口縁壺である。51は小型の器種で、口径5.3cm、



第６図　SC30出土遺物実測図（1/1・1/3・1/4）



第７図　SC32実測図および出土遺物実測図（1/60・1/3）

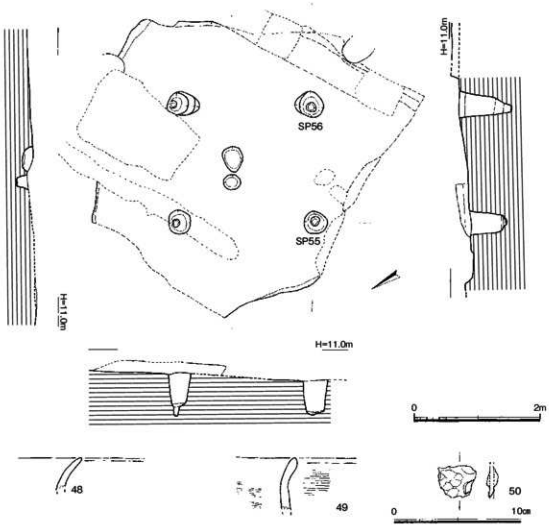


第８図　SC34実測図および出土遺物実測図（1/60・1/3）

器高12.1cm、底径5.2cmを測る。口縁部と頸部の境にはわずかに段がある。丁寧な作りで外面には細かい刷毛目が施される。52は口径7.2cm、器高18.3cm、底径7.8cmを測る。口縁部は頸部から緩やかに外反した後、膨らみ気味に内傾する。屈曲部分は強い押圧ナデで膨らみを付ける。外面には縦方向の刷毛目が施される。54 ～ 57は頸部と口縁部の境に明瞭な段がつくもので、胴部は偏球状となる。

頸部から胴部外面は縦方向の刷毛目、胴部の最も膨らむ部分は縦方向の刷毛目の後、斜め方向の刷毛目が施される。54は口径7.0cm、器高17.8cm、底径6.3cmを測る。段の部分に横方向の刷毛目が施される。55は口径7.2cm、器高21.7cm、底径7.2cmを測る。外面調整の刷毛目はやや粗い。55・56の内面には押圧ナデの痕跡が明瞭に残る。57は口径8.2cm、器高23.2cm、底径7.6cmを測る。胴部上位には長さ3.5cm、幅0.6cmの斜め上方にわずかに弧を描き、先端が尖る文様がある。貼り付けているものではなく、この部分の周囲をナデ付けることで、形を作り出している。53は壺で、偏球状の胴部から頸部が緩やかに外反しながら口縁部へと続く。口縁端部は外唇をわずかにつまみ出している。口径8.8cm、器高17.2cm、底径6.0cmを測る。内面には指頭圧痕が残る。58･59は丹塗直口壺で、頸部には２つの穿孔がある。58は口径12.6cm、器高17.2cm、底径7.8cmを測る。口縁部はわずかに肥厚させている。外面は縦方向の刷毛目、胴部最大径を有する周辺には縦方向の刷毛目の後、斜め方向の刷毛目が施される。頸部内面には指頭圧痕が明瞭に残る。59は口縁部内面は横方向の刷毛目が施される。60・61は壺の底部か。60は底径8.0cm、61は底径9.2cmを測り、外面には縦方向の刷毛目が施される。60の内面は、底部付近は指頭圧痕が明瞭で、胴部は指オサエ・指ナデと板状工具によるナデが施される。61の底部および胴部内面には指頭圧痕が残る。62・63は甕口縁部で、断面く の字状を呈する。62は口径20.0cm、63は口径22.0cmを測る。62の外面は縦方向の刷毛目、内面は指オサエが施される。63の口縁部および胴部内面には横方向の刷毛目が施される。64は甕底部で、底径8.0cmを測る。器壁はやや厚く、平底を呈する。65は丹塗広口壺口縁部で、断面鋤先状を呈し、口径26.0cmを測る。出土遺物から、弥生時代中期中葉から後葉に位置付けられる。

SE10（第10図）　調査区の中央西寄りで検出された。上部および南側が削平されているが、現状での井戸掘方は、南北方向0.8m、東西方向0.6mで歪な楕円形を呈する。深さは0.75mを測る。底面は南北方向0.6m、東西方向0.45mの楕円形状である。素掘りの井戸で、湧水はしない。中層付近で杭状



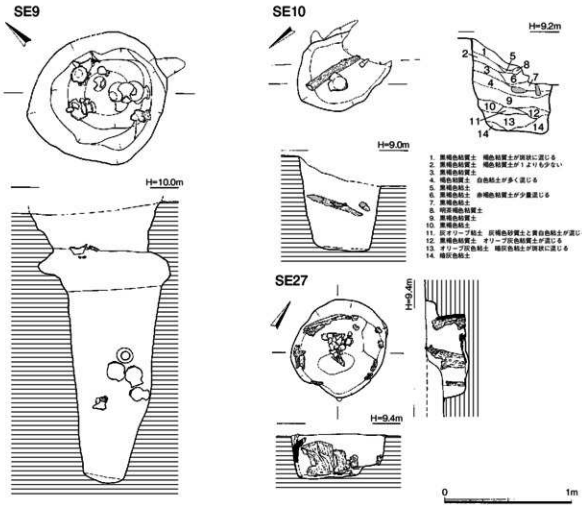
第９図　SC36実測図および出土遺物実測図（1/60・1/3）

の木製品や土器、砥石等が少量出土した。一括して廃棄されたような状況ではない。

出土遺物（第12図）　66・67はSE10から出土した。66は高坏坏部で、口径16.0cmを測る。坏部と脚部は付加法による接合である。全体に磨滅するが、外面は刷毛目が施され、その後ナデ調整される。67は高坏坏部もしくは鉢である。坏部は屈曲し、そこからわずかに外反しながら緩やかに外に開く。全面に磨滅し、調整は不明瞭だが、外面には縦・横方向の刷毛目が残る。出土遺物は少ないが、遺物から古墳時代中期前葉に位置付けられよう。

SE27（第10図）　調査区の西側南寄りで検出された。上部は大きく削平を受けており、現状での井戸掘方は、南北方向0.75m、東西方向0.7mで楕円形を呈する。湧水はしない。底面は、南北方向0.68m、東西方向0.6mの楕円形を呈する。底面には径0.6mの刳り抜きの水溜めと考えられる木質が残存していた。遺存状態はあまり良くなく、途切れている部分もある。底面で甕や支脚等の土器がまとまって出土したが、量は少ない。

出土遺物（第12図）　68～72はSE27から出土した。68は二重口縁壺の頸部か。外面には刷毛目が施される。69は支脚で指オサエ・指ナデが施される。70は土師器甕の口縁部で、口径14.0cmを測る。口縁部と胴部の境の屈曲はやや緩く、肩は張らずなで肩である。胴部内面はヘラケズリが施される。71・72は弥生土器甕の口縁部で、断面くの字状を呈し、ともに口径34.0cmを測る。外面には縦方向の刷毛目、内面には板状工具によるナデが施される。出土遺物には、弥生時代後期前半から弥生時代終末にかけてのものも含まれているが、古墳時代中期後葉に位置付けられよう。



第10図　SE9・10・27実測図（1/30）

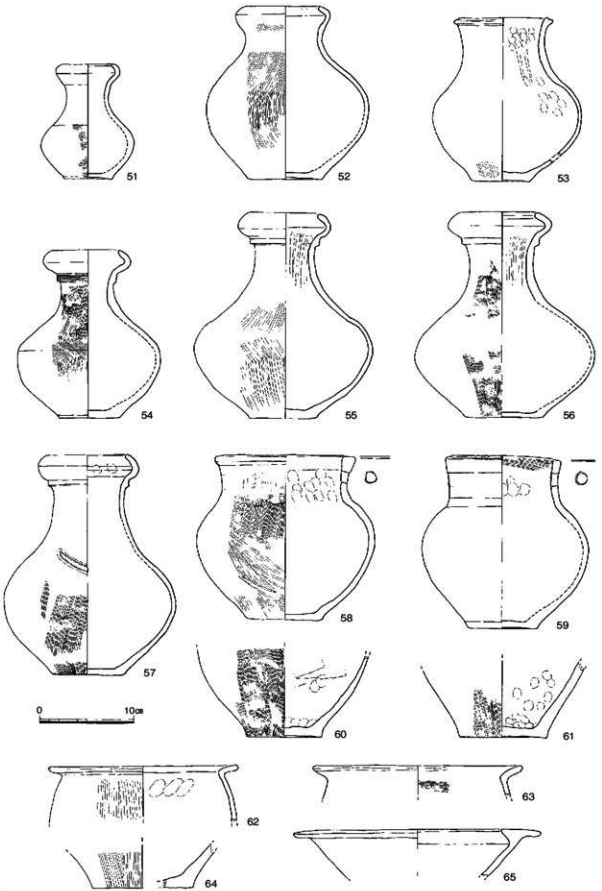
3）土坑（SK）

SK 5（第13図）　調査区の南西端中央付近で検出された。東側にはSK 6が隣接する。中央部を近代の土管によって削平される。長軸0.96m、短軸0.5 ～ 0.7mを測り、深さ0.25mが残存する。底面からはエブリが出土した。埋土は黒色粘質土である。埋土中から土師器甕等の小片が多く出土した。

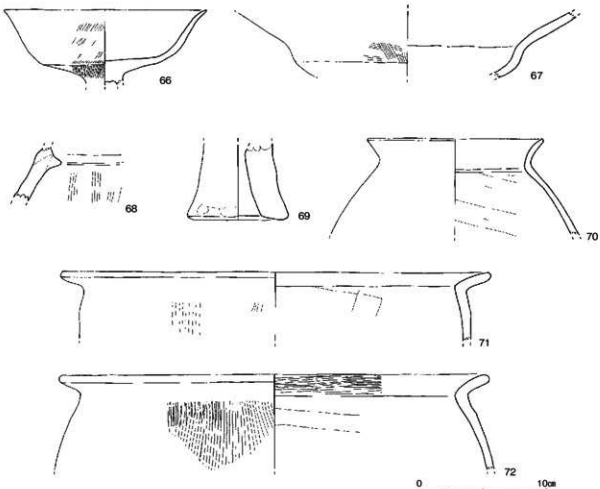
出土遺物（第14図）　86はエブリで追柾目材を用いる。樹種は不明だがカシではないようである。欠損はしているが６本歯とみられ、両方向から雑に穿孔した２孔があり、中央部には柄の当たり痕と思われる凹みがある。

SK 6（第13図）　調査区の南西端中央付近で検出された。西側にはSK 5が隣接する。西側が削平されるが、長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.34mが残存する。平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。埋土は黒褐色粘質土である。底面から10cm程浮いた状態で、完形の土師器坏を含む、甕・高坏・鉢等が出土した。

出土遺物（第14図）　73 ～ 79はSK 6から出土した。73は弥生土器壺で、頸部と胴部の境には断面三角形を呈する突帯が巡る。外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目が施される。75は断面くの字状を呈する甕口縁部である。口径30.0cmを測る。内面には横方向の後、縦方向の刷毛目が施される。74は土師器の二重口縁壺口縁部である。口径30.0cmを測る。灰～灰黒色を呈し、堅く焼き締められている。76は丸底の甕底部で、外面には縦方向の刷毛目、内面はケズリが施される。外面には煤が付着



第11図　SE９出土遺物実測図（1/4）



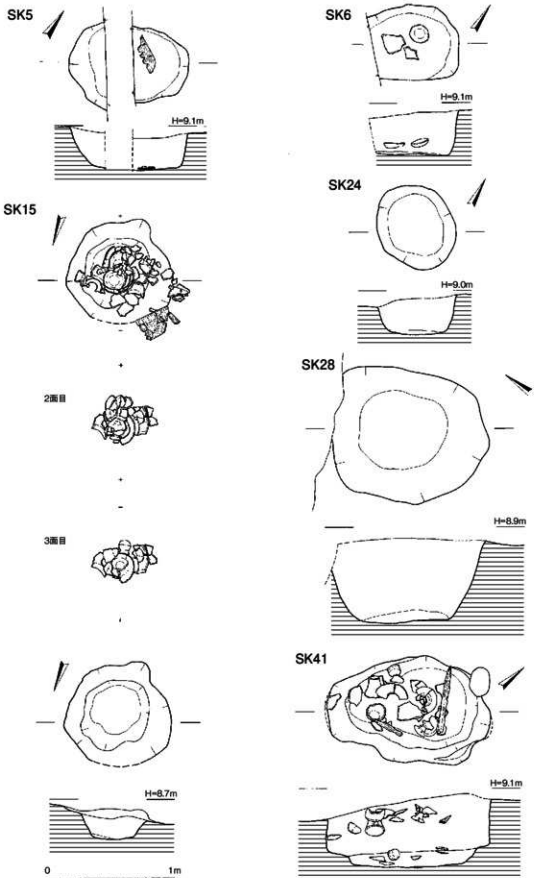
第12図　SE10・27出土遺物実測図（1/3）

する。77は完形の坏で口径12.0cm、器高4.1cmを測る。外面は横方向のヘラケズリ、口縁部内外面は横ナデ、内面はナデ調整される。78は高坏坏部で、口縁部下位で屈曲し外に開く。口径は16.0cmを測る。79は鉢で口径7.4cm、器高6.0cmを測る。外面は縦・横方向の刷毛目が施され、内面には指頭圧痕が残る。外面には煤が付着する。出土遺物には古墳時代前期後半のものも含まれるが、遺構の時期は古墳時代中期後半と考えられる。

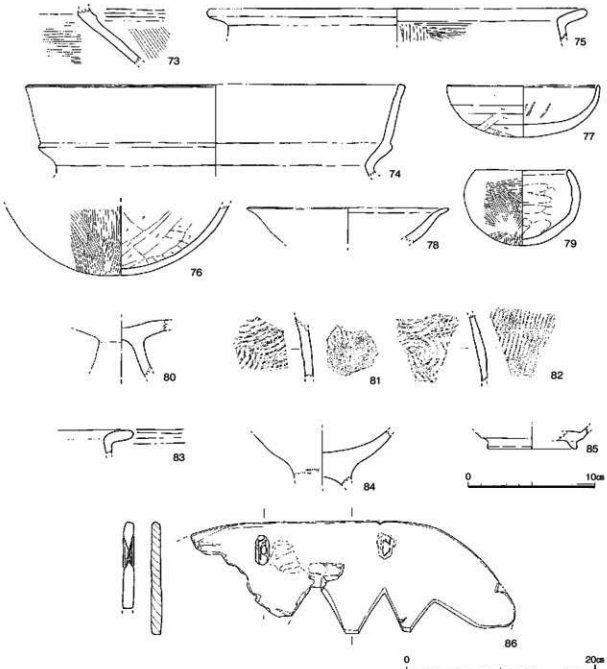
SK15（第13図）　調査区の西端に位置し、SD29によって急激に落ち込む斜面で検出された。

長軸0.84cm、短軸0.8cm、深さ0.2cmが残存し、ややいびつな円形を呈し、二段掘り状である。中央部に土師器壺・甕・高坏・鉢など多くの土器が集中して出土した。一部入れ子になっていたものもあり、意図的な埋納であった可能性もある。掘方に接して、板状・杭状木製品が出土している。埋土は黒色粘質土である。

出土遺物（第15・16図）　87は二重口縁壺口縁部で、口径17.6cmを測り、一次口縁部は張り出し、タガ状を呈す。外面には煤が付着する。88は完形の小型丸底壺で、口径11.4cm、器高13.6cmを測る。口縁部外面から胴部は縦方向の刷毛目、底部と胴部は横方向の刷毛目、口縁部内面は横方向の刷毛目が施される。内面胴部はナデ調整され、指頭圧痕が残る。外面全体および口縁部内面に煤が付着する。89は無頸壺で、口径12.0cmを測る。器壁には凹凸があり、胴部外面と内面底部付近は縦方向の刷毛目、口縁部内面は横方向の刷毛目、胴部中位はヘラケズリが施される。内面胴部と口縁部の境には指頭圧痕と粘土の接合痕が残る。刷毛目は目の細いものと太いものが混在する。外面全体に煤が付着し、内



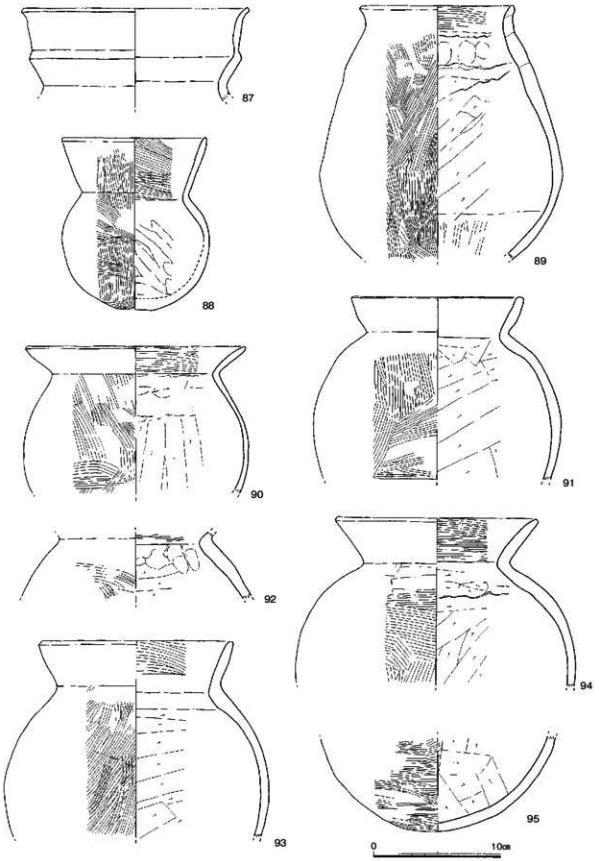
第13図　SK５・６・15・24・28・41実測図（1/30）



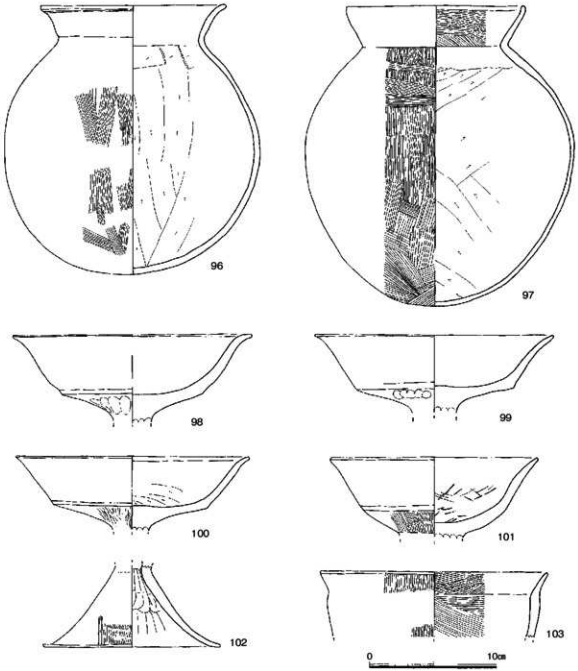
第14図　SK５・６・24・28出土遺物実測図（1/3・1/4）

面底部付近には炭化物が付着する。90～97は甕である。90は口径17.4cmで、口縁部は直線的に外傾するが口縁端部付近でわずかに内湾し、端部はわずかにつまみ上げられる。胴部外面は粗い縦・横方向の刷毛目、口縁部内面は横方向の刷毛目、胴部はヘラケズリが施され、上位には粘土の接合痕が残る。全体に煤が厚く付着する。91は口径13.6cmで、口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がる。

外面は縦・横方向の粗い刷毛目、内面はヘラケズリ、口縁部内外面から肩部はヨコナデが施される。器壁は厚く、全体に煤の付着が著しい。92は頸～肩部片で、外面は粗い横方向の刷毛目、内面頸部は横方向の刷毛目、胴部下位はヘラケズリが施され、頸部の下位には指頭圧痕が残る。器壁は厚い。灰褐色を呈し、非常に堅く焼き締まっている。93は口径15.0cmで、口縁部は直立気味に立ち上がる外面は粗い縦方向の刷毛目、口縁部内面は横方向の刷毛目、胴部内面はヘラケズリが施される。口縁部下位は板状工具によりナデ調整される。器壁はやや厚く、口縁部外面には煤が付着している。94は口径

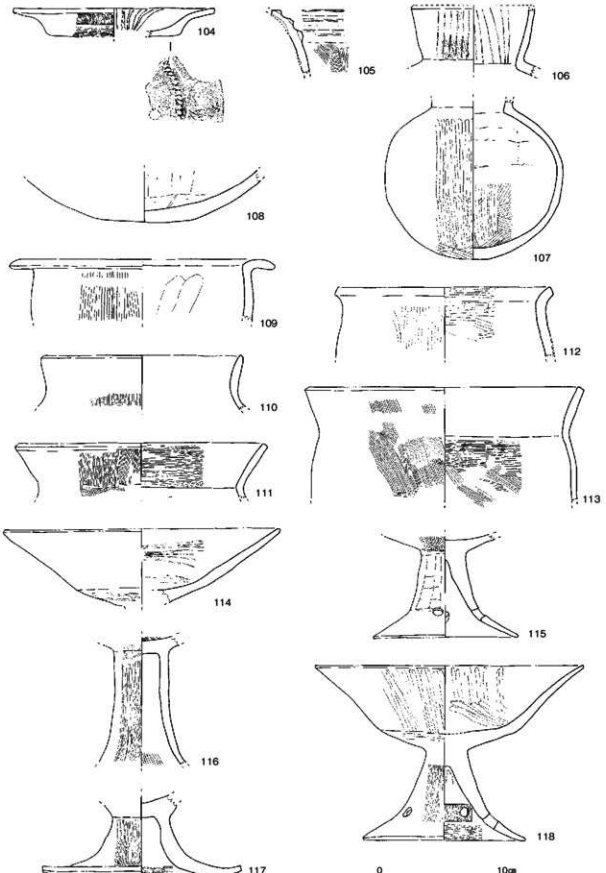


第15図　SK15出土遺物実測図①（1/3）

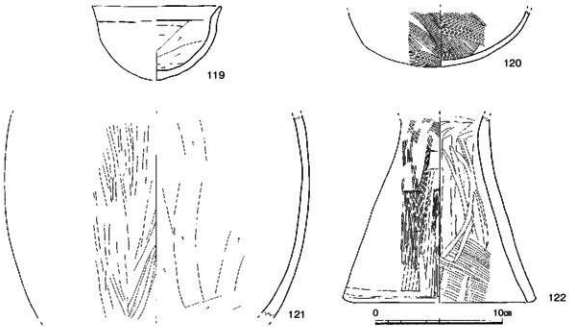


第16図　SK15出土遺物実測図②（1/3）

15.6cmで、口縁部は直線的に外に開く。胴部上位外面と口縁部内面は横方向、胴部外面下位は縦方向の粗い刷毛目が施される。外面肩部は板状工具でナデ、胴部内面はヘラケズリが施される。肩部内面に粘土の接合痕が残る。外面に煤が付着し、内面胴部には炭化物が残る。95は底部で、器壁は厚く、外面は粗い横方向の刷毛目、内面はヘラケズリが施される。96は口径14.6cm、器高21.3cmを測る。口縁部は外反し、口縁端部はわずかに肥厚させる。胴部は球形を呈し、外面は縦方向の刷毛目、内面胴部はヘラケズリ、肩部内面は横方向のケズリが施される。口縁部内外面と肩部外面は横ナデ調整される。97は口径13.9cm、器高23.8cmを測る。口縁部はわずかに内湾し、口縁端部はわずかにつまみ上げられる。胴部は楕卵形に近い。胴部外面は縦方向の刷毛目、肩部・胴部下位には横方向の刷毛目、口縁部内面は斜め方向の後、横方向の刷毛目、胴部内面はヘラケズリが施される。胴部の下位と上位でヘラケズリの方向を変えている。外面全体に煤が厚く付着する。底部内面には炭化物がみられる。98



第17図　SK41出土遺物実測図①（1/3）



第18図　SK41出土遺物実測図②（1/3）

～102は高坏で、98～101は坏部である。すべて坏部は屈曲する。98・100・101はやや内湾気味に外傾し、99はわずかに外反する。98・101はやや深い坏部である。99の坏内面底部にはヘラ状工具によるナデの圧痕がある。100の坏部外面下部には刷毛目が残る。坏部内面底部はヘラケズリ、上半は板状工具による横ナデが施される。101の坏部外面下半には縦方向の刷毛目が残り、坏部内面下半は板状工具によるナデが施される。102は脚部で、底径14.0cmを測る。脚端部はわずかに外反する。外面は縦方向の刷毛目後、横ナデによりナデ消される。内面は板状工具による横方向のナデが施される。

103は鉢口縁部で、口径18.0cmを測る。外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目が施される。外面胴部上位は、刷毛目がナデ消される。出土遺物から、古墳時代中期前半の遺構と考えられる。

SK24（第13図）　調査区の南東端付近で検出した。現状で長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.3mを測る。埋土は黒色砂質土で黒色粘質土が混じる。

出土遺物（第14図）　80～82はSK24から出土した。80は弥生土器高坏で、内外面ともナデ調整される。81・82は須恵器甕の胴部か。外面には平行叩き、内面には同心円文の当て具痕が残る。82の外面には２条の沈線がある。出土遺物から古墳時代中期後半～後期前半に位置付けられよう。

SK28（第13図）　調査区の中央部南東側に位置する。北側がわずかに削平されるが、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ0.7mを測る。平面形は不整な楕円形を呈する。埋土は黒色砂質土で黒色粘質土が混じる。埋土中からは、弥生土器や土師器の小片が出土した。

出土遺物（第14図）　83～85はSK28から出土した。83は断面逆Ｌ字状を呈する甕口縁部である。

84は脚付の鉢である。外面にはわずかに縦方向の刷毛目が残る。85は土師器高台付椀の底部である。底径は7.0cmを測る。高台周辺は横ナデ調整される。出土遺物には、弥生時代から古代の遺物が含まれるが、８世紀頃に位置付けられようか。

SK41（第13図）　調査区の西側南東寄りで検出された。東側２mにはSE27が位置する。長軸1.25m、短軸0.85m、深さ0.45mを測る。平面形はやや不整な長楕円形を呈する。壁面はほぼ垂直に掘り込まれている。また、底面は長軸1.0m、短軸0.75m、深さ0.15mの長楕円形状に掘り込まれ、ニ段掘りとなっている。埋土は黒色粘質土である。上層付近およびニ段掘り状になる部分で土師器の高坏、鉢、器台

や杭状木製品等がまとまって出土した。

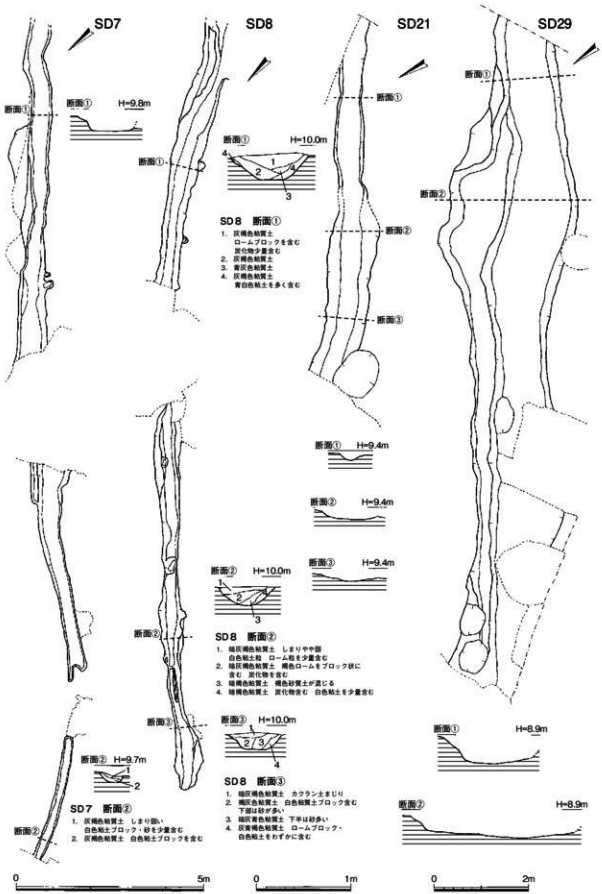
出土遺物（第17・18図） 104は二重口縁壺口縁部で、精製品である。口径16.0cmを測る。二次口縁の端部は平坦に整えられ、外面には縦方向の密なヘラミガキ、その下位には強い横方向の刷毛目、一次口縁の端部外面には刻目、一次口縁の下面にもヘラミガキが施される。さらに穿孔が１箇所認められる。内面には暗文風のヘラミガキが認められる。105は丹塗壺の胴部片で、断面台形を呈する３条の突帯が巡る。突帯の中央部はわずかにくぼませている。106・107は小型丸底壺である。106は口縁端部が欠損するが、口径9.8cm程度に復元できる。口縁部外面は縦方向の刷毛目の後、暗文風のミガキが施される。口縁部内面は横方向のヘラケズリの後、暗文風のミガキが施される。107は胴部最大径14.0cmを測る。外面はヘラミガキ、胴部内面下半は刷毛目が施される。上半には粘土紐の接合痕が残る。109は甕口縁部で、断面逆Ｌ字状を呈し、口径21.0cmを測る。胴部外面は縦方向の刷毛目、内面は指頭圧痕が残る。110 ～ 113は甕口縁部である。110は直立気味に立ち上がり、口縁端部をわずかに内湾させる。口径16.6cmである。111 ～ 113は直線的に外傾する。いずれも胴部外面は縦方向の刷毛目が施される。111の口縁部内面は横方向の刷毛目、胴部内面はヘラケズリが施される。112・113の胴部内面は横方向の刷毛目が施される。114 ～ 118は高坏である。114は口径22.0cmを測り、内外面ともヘラミガキが施され、赤色顔料が塗布されていたようである。115の脚柱部は板状工具による横ナデが施される。４箇所の穿孔がある。116は脚柱部で、外面は縦方向の刷毛目、坏部内面はヘラミガキが施される。内面には絞り痕が残る。117は低脚の脚部である。端部は外反する。外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目とナデが施される。118は坏部口径21.2cm、器高13.8cm、底径12.6cmを測る。坏部の内外面にはヘラミガキ、脚部外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目が施される。裾部には穿孔が４箇所ある。119は小型の鉢で、口径10.2cm、器高5.8cmを測る。内面はヘラケズリが施される。120は壺底部か。内外面に刷毛目が施される。121は長胴甕胴部で、外面は粗い縦方向の刷毛目、内面はヘラケズリが施される。内面には当て具の痕跡があり、全面に炭化物が付着する。122は器台で、底径15.3cmを測る。外面と内面下位は粗い刷毛目、内面は指オサエ後、ヘラナデが施される。出土遺物には弥生時代中期後半～古墳時代前期のものが含まれる。遺構の時期は古墳時代初頭頃と考えられる。

４）溝・自然流路（SD）

溝状遺構としては、調査区の中央付近で２条と、調査区西側の遺物包含層が堆積する地形の落ちの部分で２条の自然流路を確認した。

SD ７（第19図） Ⅰ・Ⅱ区のほぼ中央を北東から北西方向に走り、両端とも調査区外にさらに延びる。撹乱や削平を受け、分断される部分もあるが、長さ約25mを確認した。幅は0.3 ～ 0.8m程度である。深さは0.1 ～ 0.3m程が残存する。埋土は灰褐色粘質土と青灰色粘質土である。水が流れた形跡はなく、区画溝あるいは地形の際に掘られた溝であると考えられる。埋土からは、弥生時代～中世の土器小片が出土した。龍泉窯系青磁碗の底部等も出土しており、15世紀頃の遺構と考えられる。

SD ８（第19図） Ⅰ・Ⅱ区の中央付近をほぼ東西方向に走り、両端とも調査区外にさらに延びる。東端でSD ７と重複する。東端のさらに先の部分を調査できなかったため、２条の溝が交差するのか、あるいは合流し、１つの溝となるのかは不明である。SD ７と同様に撹乱や削平を受け、途切れる部分もあるが、長さ約22mを確認した。幅は0.3m ～ 0.8mである。深さは0.2 ～ 0.3m程が残存する。埋土は暗灰褐色粘質土・灰褐色粘質土で、水が流れた形跡はない。SD ７と同様の性格を有すると考えられる。埋土からは弥生時代～中世までの土器小片が出土したが、図示できるものはない。中世の瓦



第19図　SD7・8・21・29実測図（1/100・1/80・1/40）

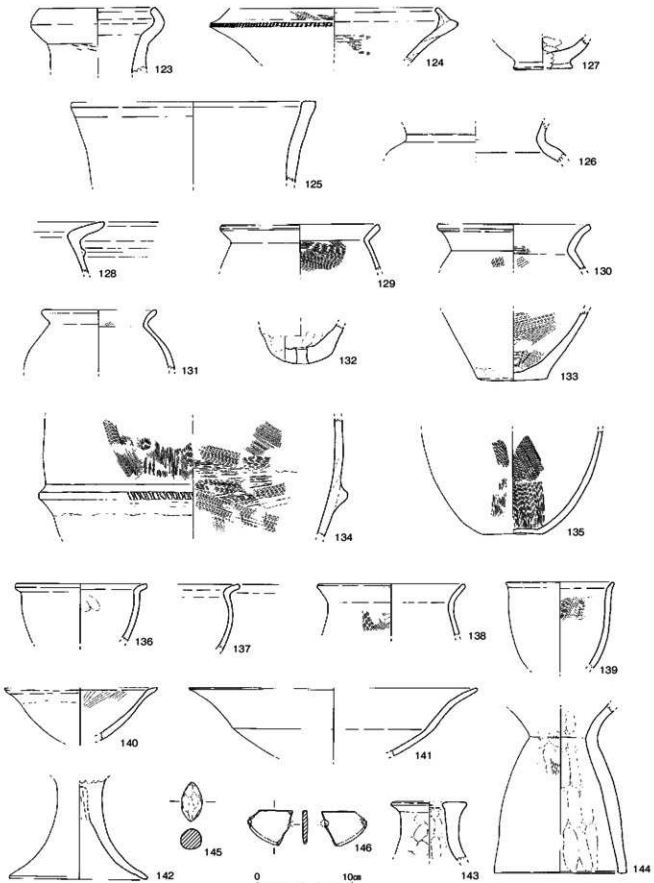
質土器等が出土しており、15世紀～16世紀頃に位置付けられようか。

SD21（第19図） Ⅱ区の南側で確認された黒褐色粘質土の遺物包含層上で検出された。長さ約10m、幅は0.6m～1.2mで、深さは0.15～0.2mほどが残存する。埋土は、灰褐色粘質土で粗砂が多く混じる。Ⅰ区側でも、Ⅱ区で検出された部分を延長したあたりに、わずかに落ち込む部分があり、本来はⅠ区側にも延びていたものと推定される。浅い溝であるが遺物の出土量は多い。弥生時代から古代までの土器や土師器、須恵器、瓦、黒曜石剥片等が出土した。

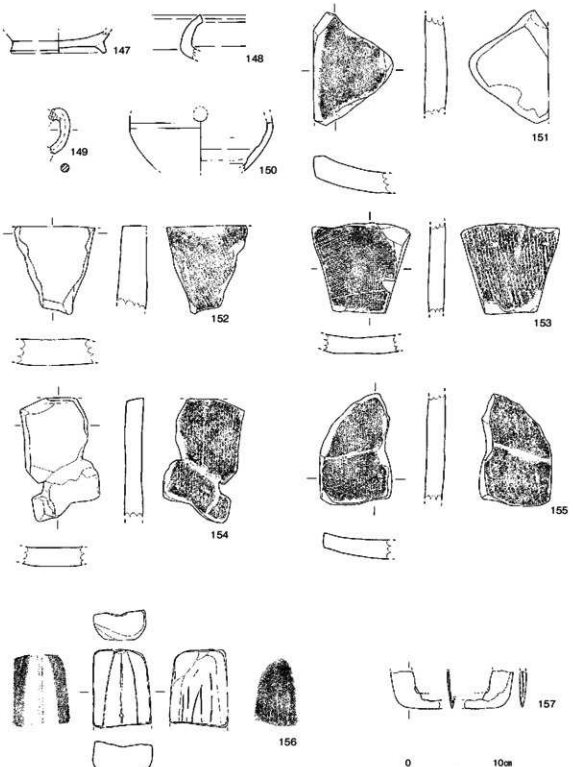
出土遺物（第20・21図） 123は袋状口縁壺で、頸部外面に調整時の工具痕が残る。124は二重口縁壺の口縁部で、一次口縁端部には刻目が施される。125は広口壺の口縁部で、口径26.0cmを測る。127は小型壺底部で、底部は円盤貼り付けである。128～131・138は、甕口縁部で、断面くの字状を呈する。128は口縁部下部に断面三角形の突帯が1条巡る。129の内面は横・斜め方向の刷毛目が施される。130の口縁端部周辺はわずかに外反する。口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦方向、頸部から胴部内面は横方向の刷毛目が施される。131の内面頸部にはわずかに刷毛目調整が残り、138の外面は縦方向の刷毛目、口縁部周辺は内外面とも横ナデが施される。139は小型の甕で、口縁部はわずかに外反する。胴部内面上部はヘラ状工具による横ナデ、下部は下から上へナデ上げられており、その痕跡が刷毛目状に残る。133は甕の底部で、内面は横・斜め方向の刷毛目が施され、内外面の底部周辺には指オサエの痕跡が残る。134は甕胴部で、台形状の突帯が貼付され、刻目が施される。内面には粘土紐の接合痕が残る。135は甕底部で、中央部がわずかに凹む。内外面とも縦方向の刷毛目が施される。132は甑底部で、底部の中央には棒状工具による穿孔がある。136・137・139は小型の鉢で、136の内面には指頭圧痕が残る。140～142は高坏である。140は内外面とも粗い指ナデが施され、内面には刷毛目がわずかに残る。141は坏部で脚土は精良であり、微細～中砂粒と微細な雲母を含む。二次的に被熱する。142は脚部で、内面に絞り痕が残り、指オサエが施される。外面には赤色顔料が塗布されるが、ほぼ剥落する。143は支脚で、中央部に楕円形の穿孔がある。144は器台で、全体に指オサエ・指ナデ調整される。145は土製投弾で、全体に指オサエ・ナデが施される。146は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の石庖丁で、全体の半分が欠損し、両面の研磨は比較的丁寧である。147は瓦器の高台付坏か。やや外側に開く高台が貼付される。126・148～150は須恵器で、126・148は甕である。126はやや小型の甕頸部で、外面には自然釉がかかる。148の口縁端部はわずかに摘み上げられる。149は把手で、灰色を呈し、胎土は緻密である。150は鍋で、底部側がややくびれてすぼまっており、小型の樽形鍋である可能性もある。151～155は平瓦で、全体に磨滅が著しい。151は灰色を呈し、胎土は緻密である。ヘラ状工具により面取りされ、凹面には布目が残る。152は灰褐色を呈し、凸面には縄目叩き痕が残る。153は黄白色を呈し、軟質で、凸面には縄目叩き痕、凹面には布目痕が残る。154は灰白色を呈し、やや軟質で、凸面には縄目叩きが残る。端部は面取りされる。155は灰白色を呈し、凹面には布目が残る。ヘラ状工具により面取りされる。156は銅戈鋳型で、石材は黄灰色で微細な結晶体が観察され、いわゆる石英長石斑岩である。銅戈の鋒部分が残存し、全長24～25cm程に復元でき、身幅3.5cm程度で、身厚はやや薄いものである。単面笵であるが、笵面の裏面には戈を描いた線刻がある。157は青銅製鋤先で、半分程度が欠損する。

SD29（第19図） 調査区の西端付近で検出された。台地から低湿地へ落ちる際の部分で検出した。長さ17.2m、幅1.6～3.5m、深さは約0.5mほどである。両端は調査区外に延びる。落ち際に堆積する遺物包含層に切り込んで流れる。

出土遺物（第22図） 158は小型の壺である。外面には粗い刷毛目が施され、内面には指頭圧痕が残る。159は高坏脚部で、外面は粗い縦方向の刷毛目が施され、内面には指絞り痕が残る。160～164

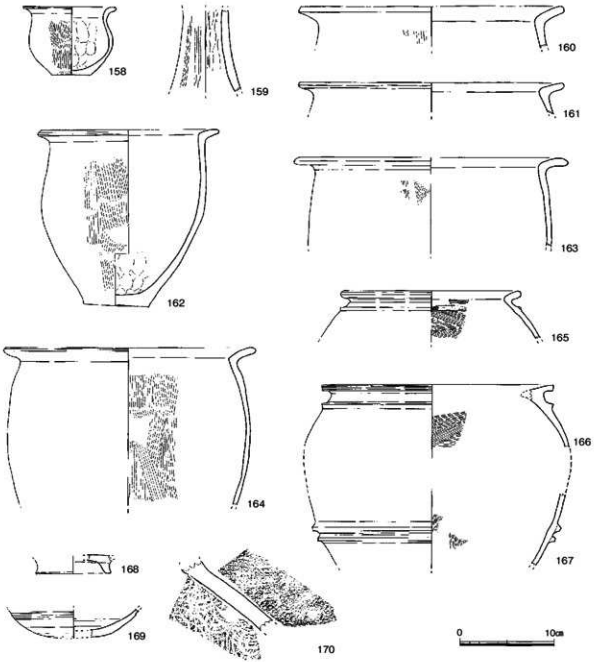


第20図　SD21出土遺物実測図①（1/4）



第21図　SD21出土遺物実測図②（1/4）

は甕である。口縁部は断面くの字状を呈する。162は完形だが全体に歪みが著しい。外面はやや粗い刷毛目が施される。口縁部周辺には炭化物が付着する。163の外面はナデ後に目の細かい刷毛目が施される。165～167は甕棺で、65は中型甕棺で、口径38cmを測る。口縁部下部に断面三角形の突帯が１条貼付される。内面は押圧ナデ後にやや粗い横方向の刷毛目が施される。166･167には接点はないが、器形や色調、胎土からみて同一個体であろう。口径50.8cmを測る。口縁部の下部に断面三角形の突帯

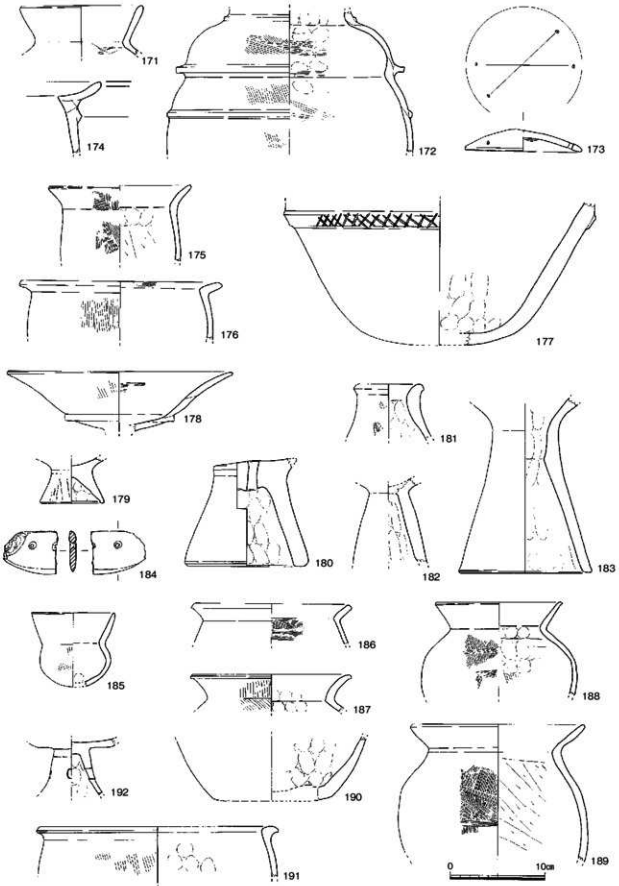


第22図　SD29出土遺物実測図（1/4）

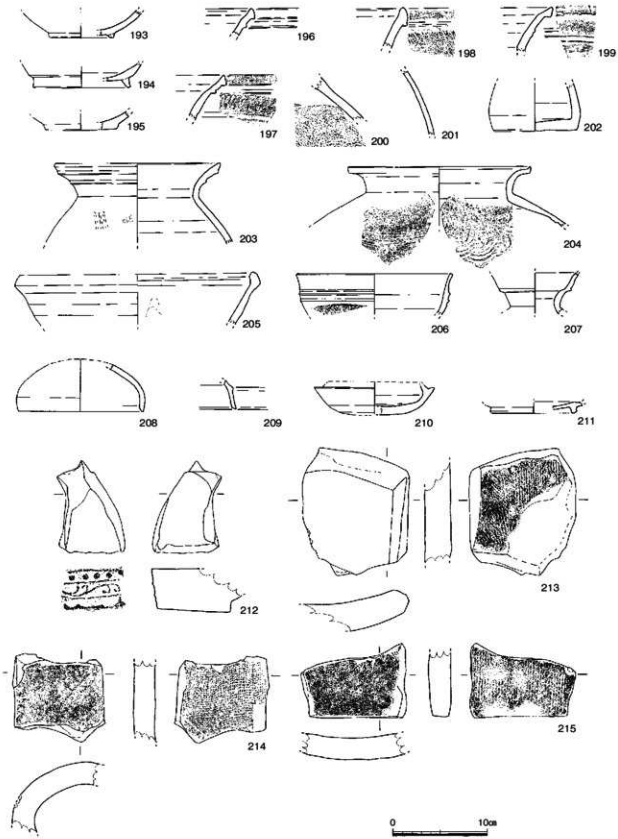
が１条、胴部に断面台形の突帯が２条貼付される。内面上位は押圧ナデ後に粗い刷毛目が施され、下位は押圧後ナデで、一部に縦方向の刷毛目が残る。168は土師器高台付碗で、底径8.0cmを測る。169・170は須恵器である。169は坏底部とみられ、底部はケズリ後ナデが施される。170は大甕肩部で、外面には格子目叩き、内面には同心円文の当て具痕が残る。胎土は緻密で、灰色を呈する。出土遺物には、弥生時代から古代のものが含まれるが、時期は８世紀以降であると考えられる。

5）遺物包含層

調査区の西～南東側では、地形の落ちの部分に堆積した遺物包含層が検出された。暗灰褐色粘質土と黒褐色粘質土の概ね２層に区分できる。遺物は、弥生時代中期～古代の土器・土師器・須恵器・瓦等が多く出土し、全体に磨滅しているものが多い。



第23図　遺物包含層出土遺物実測図①（1/4）



第24図　遺物包含層出土遺物実測図②（1/4）

出土遺物（第23・24図） 171は小型の壺で、内面には板状工具によるナデが施され、刱圧痕がある。172は丹塗甑形壺で、外面は縦・横方向、内面は横方向、一部に斜め方向の刷毛目が施され、頸部付近には指頭圧痕が残る。173は丹塗無頸壺蓋で、174は甕口縁部で口縁部下位に断面三角形の突帯が貼付される。175・176は甕で、ともに外面は縦方向の刷毛目調整、内面には指頭圧痕が残る。176の口縁部は断面くの字状を呈する。177は甕胴部で、薄帯状の突帯が１条巡り、刻目が施される。底部内面に指頭圧痕が残る。178は高坏坏部で、屈曲部は張り出し、端部はやや下方に摘まれ垂下する。外面はやや粗い縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目が施される。179は小型台付甕あるいは鉢の脚部で、外面はヘラ状工具によるナデが施される。180は杏形支脚で、全体に押圧ナデが施される。外面には淡い黒斑がある。181・183は器台で、181の外面はナデ調整されるが、一部に縦方向の刷毛目が残る。183は整形・調整ともに粗く、外面には部分的にヘラ状工具によるナデ痕が、内面には指頭圧痕・粘土紐の接合痕が残る。182は高坏脚部で、胎土には微細な砂粒を多く含み、赤鉄鉱粒が少量みられる。184は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の石庖丁で、半分が欠損する。丁寧に研磨され、刃部は鋭い。185は小型丸底壺で、外面には刷毛目、内面底部は指頭圧痕が残る。186 ～ 189・191は甕である。186の口縁端部は下方にわずかに摘み出される。187の189は外面縦方向の刷毛目で、中位は斜め方向の刷毛目が施される。190は甑底部で、内面底部には指頭圧痕が残る。192は高坏脚部で、脚柱部の対称位置に４つの穿孔がある。193・194は瓦器碗の底部、195は緑釉陶器で、高台は円盤状を呈する。208は土師器坏蓋としたが、坏身の可能性もある。内外面全体に炭化物様の黒色物が付着し、内面は漆のような光沢がある。194 ～ 207・209 ～ 211は須恵器である。196 ～ 201・203・204は甕である。口縁部外面には櫛描波状文が施されるものが多い。200の外面には厚く自然釉がかかる。201の外面は縦方向の、204は横方向の刻目叩きが施される。202は長頸壺の底部か。底部はヘラ切り離しで、外面底部上位はヘラケズリが施される。205は捏鉢である。206・207は甕で、頸部には櫛描波状文が施される。209は坏蓋で５世紀末頃、210は坏身で６世紀後半のものである。211は高台付坏底部である。212は焼成はやや不良で、淡灰白色を呈する。瓦当は周囲を圏線で縁取り、内部はほぼ均等に３段の文様帯に分割される。文様は外区上帯に連珠文、内区に扁行唐草文、外区下帯には不明瞭だが鋸歯文が陽刻される。214は丸瓦で、青灰色を呈し、堅緻である。凸面には格子目叩き、凹面には布目が残る。213・215は平瓦で、凸面には縄目叩き、凹面には布目が残る。

Ⅳ．結　　語

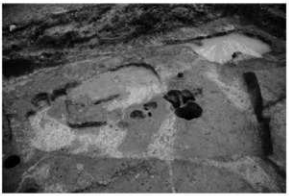
高畑遺跡第21次調査区では、大規模な造成や削平によって、遺構の残存状態は良いとは言えないが、弥生時代中期の井戸１基、古墳時代中期の竪穴住居４軒、古墳時代初頭・中期前半の廃棄土坑、古墳時代中期・後期後半の井戸各１基、古墳時代中期～古代にかけての流路、古代～中世の溝２条、土坑、ピット、自然流路等を確認した。調査区の西～南西部で確認された遺物包含層からは、弥生時代中期～古代にかけての土器・土師器・須恵器・瓦・石器などが多量に出土した。この遺物包含層は丘陵裾部から低湿地・河川へ至る緩斜面上に堆積していると考えられる。さらに、遺物包含層やＳＫ15等の遺構は、調査区西側の自然流路に削平されており、古墳時代中期から古代まで、丘陵裾部一帯に集落が広がっていたことが窺え、この周辺の地形と土地利用の様相が窺える。調査では、中細形銅戈鋳型が出土し、周辺の遺跡での出土例からみても、青銅器生産に携わった集団の存在を示唆するものであろう。今回の調査によって、現在は消失してしまった丘陵とその裾部一帯に展開していたと考えられる弥生時代～古代・中世に至るまでの集落の様相を窺い知ることができる成果が得られた。

写真図版

(1)　Ⅰ区全景（南西から）

(2)　Ⅱ区全景（南西から）

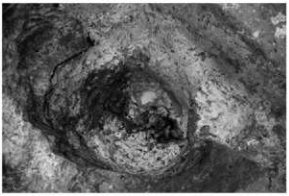
(3)　Ⅱ区東側全景（南西から）



(4) SC30（北から）

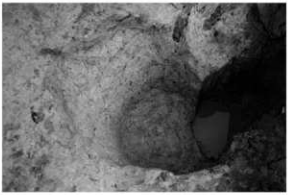
(5) SC32（北東から）

(6) SC36（北東から）



(7) SE 9遺物出土状況（北から）

(8) SE 9（北東から）



(9) SE10（北から）

(10) SE27（東から）

(11) SE27（南から）

⑿　SK 5（南東から）

⒀　SK15（北から）

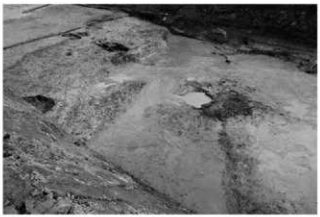
⒁　SK41（南から）

⒂　銅戈鋳型出土状況（南東から）

⑯　青銅製鋤先出土状況（北から）

⑰　SD ７・８南側部分（北西から）

⑱　遺物包含層検出状況（北西から）



⑲　SD29（北西から）

⑳　SE ９出土　51

㉑　SE ９出土　57

㉒　SE ９出土　58

㉓　SE ９出土　59

㉔　SK15出土　96

㉕　SK15出土　97

(26) SK15出土　89

(27) SK15出土　100

(28) SK41出土　107

(29) SK41出土　118

(30) SD21出土　157

(31) 遺物包含層出土　221

報告書抄録

ふりがな	たかばたけいせき　－だい21じちょうさ－
書　　名	高畑遺跡
副　書　名	－第21次調査－
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1284集
編 著 者 名	吉田大輔
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号　TEL 092-711-4667
発行年月日	2016年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
たかばたけいせき 高畑遺跡	ふくおかしはかたく 福岡市博多区 いたがきちょうめいばん 板付6丁目1番 ばん・ばん 53・54号	40132	020095	33°33′35″	130°27′17″	20141001 ～ 20141226	1,236	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高畑遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 奈良時代	竪穴住居、井戸、 土坑、溝、ピット、 自然流路	弥生土器、土師器、 須恵器、瓦、土製品、 石製品、金属製品	中細形銅戈鋳型、 青銅鋤先出土

要　　約	福岡平野の東を北流する御笠川中流域左岸に広がる洪積台地上に展開する高畑遺跡の調査である。調査では弥生時代中期の井戸１基、古墳時代初頭の廃棄土坑１基、古墳時代中期の竪穴住居４軒、井戸２基、廃棄土坑１基、古墳時代中期～古代にかけての溝、中世の溝、土坑、ピット、自然流路等を確認した。古墳時代中期後半の竪穴住居の１棟からは、滑石製小玉やその未製品が数点だが出土した。調査区の西～南西部で確認した遺物包含層からは、弥生時代中期から古代にかけての土器・土師器・須恵器・瓦などが多量に出土し、青銅製鋤先や中細形銅戈鋳型も出土した。今回の調査では、丘陵裾部に展開していたと考えられる集落域の様相を窺い知ることのできる成果を得ることができた。

高畑遺跡

－ 第21次調査 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1284集

2016年３月25日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1－8－1
電話　092-711-4667

印刷　ダイヤモンド秀巧社印刷株式会社
福岡市東区松田3－9－32
電話　092-621-8711